

## 博物館のインクルージョンって何だろう？

○安曾潤子  
インクルーシブミュージアム

2022年に改定された国際博物館会議（ICOM）の新たな「博物館の定義」に含まれた重要な理念の一つが「インクルーシブ（inclusive）」です。この概念は日本の博物館でも徐々に意識され始めています。

私は、この「インクルーシブ」を軸に、博物館がすべての人にとって利用しやすく、参加できる場となるよう、国内外の事例を共有しつつ、全国の博物館スタッフへアドバイスをを行っています。しかしながら、「インクルージョン」という言葉がカタカナ語（輸入概念）であるためか、「そもそもインクルージョンとは何なのか？」という基本的な疑問をいただくことも少なくありません。

この基本が十分に理解されなければ、現場での具体的な応用も難しくなります。そこで今回は、「インクルージョン」の本質を整理し、実践のヒントとなる5つのポイントをご紹介します。

### インクルージョンの5つの重要なポイント

1. インクルージョンは「障害」だけに関わるものではない
2. 合理的配慮は「特別なサービス」ではない
3. 体験の本質に「参加できている」ことが重要
4. 計画段階から多様な人々と一緒に進める
5. インクルージョンは「目的地」ではなく「道のり」である

この5つのポイントを道しるべに、みなさんの博物館がより開かれた存在となるよう、一緒に歩みを進めていきましょう。

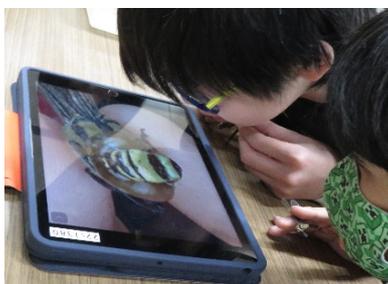
## 千葉盲学校における中央博物館との連携授業 ～博物館学習を通しての事例報告～

○東 あずさ  
千葉県立千葉盲学校

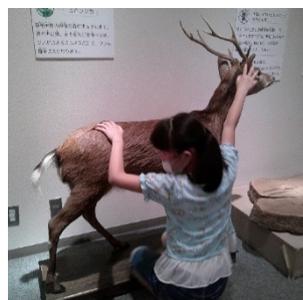
千葉盲学校は、千葉県四街道市にある、県内唯一の視覚に障害を有する方のための学校です。創立113年になります。

千葉盲学校では1993年から現在まで、主に理科の学習として、中央博物館の職員に授業を行っていただく「博物館学習」を実施しています。また、その際は、本校職員と博物館の先生との連携が欠かせません。様々なテーマに関する教材を実際に見たり触ったり、体験したりすること、また学芸員の先生の話の聞いたり質問に答えていただいたりすることで、子供たちの記憶に残る、貴重な体験となっています。

そこで本発表では、博物館学習実施までの流れやテーマ設定、当日の児童生徒の様子などを中心に、博物館との連携について紹介します。



昆虫を拡大して見ている児童



大きさを触って確かめている児童



大きな地球年表を歩く児童



研修室での学習の様子

## 盲学校と連携したカエルを題材にした生きものの学習

○大木 淳一  
千葉県立中央博物館

発表者は2004年、2005年、2012年に千葉県立盲学校と連携し、カエルの生きものの学習を実施したのでその報告を行います。

2004年は千葉県立中央博物館、2005年・2012年は盲学校で実施し、いずれも最初に野外でカエルの観察を行い、その後、室内に移動し、千葉県の田んぼや山地に生息するカエル達やヘビの実物に触りながら観察しました。

盲学校での学習は、学校から約1km離れた田んぼまで歩き、カエルや昆虫などの生きものを観察することで、身近な自然に興味を抱くことができました。

室内での学習ではカエルを観察する際、モリアオガエルやアズマヒキガエルは比較的小さくおとなしいのでじっくり観察できました。さらにモリアオガエルの吸盤の冷たさに驚いた児童が多かったです。

また、別の事業で製作したカエルカードは、田んぼに生息するカエルの卵・オタマジャクシ・成体を写真や絵で紹介しており、さまざまなカエルの生き様を学ぶため好評でした。

これらの授業実践を通して、普段見慣れないカエルが千葉県に棲んでいることを知り、生きものの多様性の一部を学ぶことができました。

生きた教材に優るものは無いので、野外観察授業を取り入れて欲しいのですが、先生と学芸員が綿密な下見や打合せを行う必要があります。

今回の連携事業は大変有意義な授業になったと確信していますが、生きたカエルを捕獲するのに時間がかかると同時に、野外へ戻すことができないため飼育し続けなければなりません。さらに、歩いて観察した田んぼは2012年までは米作を行っていましたが、現在は休耕田となり、同様な現地観察は難しくなりました。バスを利用して市内の田んぼに出かけるなど、観察できるフィールド探しも課題となります。



盲学校の近所の田んぼで  
生きものの観察



カエルカードでじっくり観察



モリアオガエルの吸盤の  
感触を体験

## チバニアン期をテーマとした学習に合理的配慮を

○丸山啓志  
千葉県立中央博物館

2024年4月、障害者差別解消法の改正法が施行され、公的機関や民間団体と合わず、事業所には合理的配慮が求められることになりました。一方で、様々な理由で、博物館に足を運ぶのが難しい方がいます。その中には、目の不自由な方も含まれます。そこで、本発表では、千葉盲学校中高等部の生徒を対象に実施した博物館見学でのチバニアン期をテーマとした学習における合理的配慮の事例を紹介する。

はじめに、房総の地学展示室で、導入として、地層や化石に関するクイズを行った。また、普段は触ることができない地層の剥ぎ取り標本を、生徒のか方に触ってもらうことで、地層について体感してもらった。

次に、研修室で、様々な化石や骨格標本、レプリカに触ってもらうことで、チバニアン期に生息していたゾウ類やアシカ類などの哺乳類について知ってもらった。また、チバニアン期が時代名称で、千葉に因んでいることについても確認した。

そして、これまで触っていた全体の一部の標本から、全体をイメージしやすくするために、チバニアン期の古生物の実物大復元画の上を歩き、そのサイズを体感してもらい、チバニアン期の古生物について実感してもらった。

このような博物館活動をする中で、私が重要と考える3点は、①相手の背景を知る、②五感や身体感覚に訴え、モノの魅力を活かす、③博物館を楽しんでもらう、以上である。この点について、合理的配慮により取り組んでいきたい。



普段触れない剥ぎ取り標本に  
特別に触って体感する生徒



古生物（3種のゾウ）の  
実物大復元画を歩く生徒